

災禍の学校における諸現象の社会学的考察

—＜包摂＞と＜排除＞を手がかりに—

< 新型コロナ禍のもつ2つの側面 >

①学校社会における制度の問い直しの契機

←校則をめぐる議論、教育行政・入試制度改革etc.

②学校社会における規範強化の契機

←特定の児童生徒像へのスポットライト

「友達に会いたい」「勉強したい」「部活動を頑張りたい」 etc.

本稿では②に注目

【資料1 兵庫県立芦屋高校のある生徒による回顧録】

23日、やっと学校があった日。**たくさんの友人に会えて本当に嬉しかった。**私が心配していた友人はみんな無事だったが、私が心配していた友人はみんな無事だったが、たくさん友人が死んだと悲しそうに言っている子もいた。

（金延重光・佐和良一・枝澤百合子編，1996，『復興めざして——県立芦屋高校震災の記録』，兵庫県立芦屋高等学校。）

【資料2 神戸商業高校の生徒による高校受験に対する回顧録】

だが、2月の中ごろ、近くに大丈夫だったマンションがあり、そこをかりて生活することができた。前の家から、必要なものをもって運んできて、**やっと家が火も電気も使えもとどおりの生活に戻ることができた。私達家族は本当によかったです。**そして、少しずつ不安も消え、「受験」にむかって勉強することができた。しかし、日はたつばかりだんだんと近づいてくるにつれて、「受かるかな」と心配が大きくなる一方だった。……**でもやっぱり公立この神戸商業にうかることが目的なので、もう時間はないが少しでも何か勉強をしておこうと思い、震災に負けず頑張りました。**そして、受験当日、不安や緊張の中テストを受けた。そして合格できて本当にうれしかった。

(川崎凱史編, 1996, 『阪神大震災あれから一年 湧水第10号』, 神戸市立神戸商業高等学校.)

【資料3 県立芦屋南高等学校の国語科教員の回顧録】

「先生、そうと違うねん、全然違うわ。」「えー、そんなんもう忘れたわ。」「もう、どう書いたらいいかわからんわ、先生代わりに書いといて。」まるで事情聴取しているみたいだと笑われながら始めた作文指導。……生徒の話を聞いていると様々な体験談が飛び出してくる。……話せばいくらでも出てくるのに、**書けたと言って持って来るものはどれも通り一遍のものばかりだ**。なぜそうになってしまうのだろうか。何人かの生徒から得た答えはこうだった。

- 1、ある程度の量をきちんと書かなければいけないと思っていた。
- 2、何をどう書いたらいいのかわからない。
- 3、**書いてはいけないことがあると思っていた。**

……それでもその中に少しずつではあるが独自の体験談や心境が書かれていたものもあり、それを中心にして書き直させた。……学校で書かされる文章は提出しなければならないものでもあり、教師が読むものである。**生徒にしてみれば、「こんなことを書いたらどう思われるだろうか、怒られるのではないか」などと考えてしまうらしい。**

(兵庫県立芦屋南高等学校編, 1996, 『研究紀要第7号－震災特集－阪神大震災の記録』, 兵庫県立芦屋南高等学校.)

【資料1】 【資料2】

→友人との再会の喜びや何気ない生活のありがたさ、
不安な中でも受験に向けて周りに感謝しながら懸命に勉強に励んだこと
についての記述

【資料3】

→生徒たちは「作文を書かされる」という事実から教育的意図を
敏感に読み取り、自らの経験を再構成している

【資料4 1995年11月27日毎日新聞夕刊】

神戸市立鷹取中学（近藤豊宣校長）の先生たちは二学期に入ってもなく、生徒の行動に微妙な変化を感じるようになった。集中力が散漫になり、忘れ物を注意されると口答えし、平気で遅刻する――。一学期には見られなかったこんな生徒が、少しずつ増えてきたのだ。鷹取中学区は、震災被害が最もひどかった地域のひとつ。一時は四千人を超える住民が教室やグラウンドに避難。このため、二月中旬に授業を本格再開後もしばらくは近くの須磨水族館を借りたり、学校に戻った後も、避難所が減るに伴い教室を移動。それでも「**みんなと一緒に勉強できることが楽しい**」と**活気にあふれ、ボランティア活動に参加する生徒もいた**。ところが、八月末に避難者がゼロになり、**落ち着きを取り戻したはずの二学期**。服装などの校則違反を注意されても「なんでやねん」と口をとがらせたり、近くに住みながら、避難先からの遠距離通学生と並んで学校に来る“便乗遅刻”する生徒が増えた。廊下で「肩が当たったのに謝らなかった」と同級生に手を出す生徒も。「**学校は荒れる手前にある**」

【資料4 1995年11月27日毎日新聞夕刊】

危機感を持った先生らは何度も対応策を話し合った。「一学期に我慢していたものが噴き出したのかも」「震災直後は、少しくらいの遅刻や忘れ物にも、やむを得ない事情があった。そのため、今になってしかられると『これくらいはいいやん』という不平不満が生まれるのでは」**個人面談や家庭訪問を頻繁に行うようにしたほか、休み時間や放課後に生徒と交流する時間を作ったり、生徒との「交換ノート」を始めるなど、先生の模索は続いている。**神戸市内のある小学生の養護教諭（55）は、子供たちのこうした行動を「息切れ」現象と名付ける。同小四年の則宏君＝仮名＝（10）は地震で母親と妹を亡くし、父親とも別居して近所のおば宅で生活する。「お母さんたちの分も」と、一学期は、勉強熱心で生活態度はまじめだった。しかし、夏休みが終わるところから、同級生らとゲームセンターに行ったり、買い食いをするように。養護教諭は「自分でも何でそのようなことをしているのか、分からないようだ。同情してモノを買ってあげるなど、周囲の接し方にも問題があったかもしれない」と分析する。この小学校では、児童の半数以上の家が全半壊し、親は生活再建に忙しい。最近は、「お父さんが早く帰ってくるとホッとする」などと話す児童が増えたという。養護教諭は「**懸命に頑張っている、ある時、すっと寂しくなる。子供はそういう心の揺れを繰り返す。子供の話をよく聞き、子供にやりがいを見つけさせてやる必要がある**」と話している

【資料5 2020年6月2日朝日新聞兵庫県版】

新型コロナウイルス感染拡大の影響で休校していた県内の公立小・中学校や県立学校が1日、授業を再開した。各学校は分散登校を採り入れたり、短縮授業をしたりと工夫を凝らしながら子どもたちとともに再スタートを切った。芦屋市の県立芦屋高校（生徒数954人）では、生徒の登校時間を午前と午後で分けた。校門には消毒液やマスクなどを置き、久しぶりに門をくぐる生徒らを教員らが出迎えた。石田瞳さん（3年）は書道部に所属。休校中は「リモート部活」として、友達とオンラインの展覧会をした。**「学校が休みでも、誰かに伝えるということをしたかった」**同校書道部は「書の甲子園」といわれる今年1～2月の第28回国際高校生選抜書展で近畿地区優勝を果たした。石田さんは今春に予定されていた選抜高校野球大会（阪神甲子園球場）で、出場校の履正社（大阪）のプラカードを揮毫（きごう）したが、選抜大会は中止に。**「誰も悪くないが、大会がなくなって寂しかった」**と静かに語る。

【資料5 2020年6月2日朝日新聞兵庫県版】

「**休校生活で自分自身が変わった**」と話すのは同じく芦屋高の伊藤祐太さん（3年）。母親が休校直前に体調を崩して入院し、家事を担った。「肉じゃがやロールキャベツを作れるようになった」と語る。……この日から再開した神戸市立の各学校。東灘区の市立住吉中学校では午前8時ごろ、校門前に立つ教師が、登校してくる生徒たちに入室前の手洗いうがいを呼びかけた。「**久しぶり**」「**元気してた？**」とあいさつする明るい声が飛び交った。……3年の南原拓海さん（14）は「**やっと友達に会えた**」とほっとした表情。気がかりなのは修学旅行だ。4月に沖縄に行く予定が9月に延期されたという。「**中止と思っていたけど、延期だと聞いてうれしかった。感染対策を徹底して、本当に行けたらいいな**」

【資料6 2020年9月29日朝日新聞朝刊】

コロナ禍で約3カ月間休校し、授業は大幅に遅れている。年末まで教科書が終わりそうにない科目もある。塾に行っていないので学校だけが頼りだが、ちゃんと受験指導を受けられるのか。試験がオンラインになったら、自分が感染したら……。不安は尽きない。記述式問題の導入などは見送られたが、センター試験とは問題形式が変わると聞いている。「準備が全然、間に合っていない感じ。**でも、やるしかない**」……「**初めての共通テストで不安もあるけど、やるしかない**」と覚悟を決めたのは、兵庫県立高校に通う神戸市の女子生徒。第1日程で出願し、国公立大の個別試験に向けた準備の時間を長く確保した。

【資料6 2020年9月29日朝日新聞朝刊】

記述式問題の導入や英語民間試験の活用、そしてコロナ禍を受けた9月入学の議論が浮上し、「えっ」「なんでや」と驚く日々が続いた。「**受験生がすべきは勉強。それは変わらへん**」と机に向かうが、「コロナとインフルエンザの感染拡大で、受験生への対応が直前になって変わるのだけは困る」と不安は消えない。首都圏の公立進学校では今月中旬から、出願書類を生徒に清書させた。7月初めには「共通テスト200日前集会」を開き、3年生の不安を払拭（ふっしょく）する努力もしてきた。校長は「今の3年生は本当にかわいそう。入試改革が二転三転し、コロナも重なって不安が増しただろう。**本番まで前向きに勉強するよう、励ましつづけるしかない**」と話す。

【資料4】

→震災による混乱が沈静化する時期になると、子どもたちの「荒れ」をめぐる言説が現れ始める（「荒れ」の実数把握は困難）

【資料5】 【資料6】

→コロナ禍においても学校文化に適合的な語りがメディアによって肯定・増幅

「受験生がすべきことは勉強」「やるしかない」といった声
専門家の意識とは裏腹に「今まで通り」「いつも通り」が強調される

【資料7 2020年8月22日朝日新聞朝刊】

コロナ禍による長期休校で何を思ったのか。**子どもたちが率直な思いをつづった作文の数々を、教師たちが定期誌で紹介した。**子どもたちの筆を通して、休校中のしんどさやそれを乗り越えようとするたくましさ、**学校再開後の喜びが、まっすぐに伝わってくる。**……高知県の小6、西内陸仁さんは、こう書き始めた。《ぼくは、休みになるので、うれしかったです。》だが最後はこう締めた。《学校に行くと、ひさしぶりのみんなの声を聞いたり笑顔を見たりしました。ぼくは、こう思いました。「自由はそんなにいいことばかりじゃない」と、休みたい気持ちを心におしこめました。》……作文教育に取り組む教師らで作る日本作文の会の白木次男委員長は「東日本大震災でもそうだったが、**子どもが不安や悩み、またその中でも喜びや楽しみを見つけようとする気持ちを、文で表現することには大きな意味がある。**それを先生や友だちに読んでもらい、共有してもらうことも安心につながります」と話す。

【資料8 2021年1月22日神戸新聞】

「**子どもが通う小学校が学年崩壊しています**」。冬休み前、神戸市内の母親から神戸新聞報道部に悲痛な電話が寄せられた。児童が授業中に歩き回り、注意されると先生を罵倒する。授業は成立せず、登校できなくなった児童もいる。新型コロナウイルス感染症による長期休校や、行事の縮小・中止、詰め込み授業が続いた2020年度。児童・生徒への影響を指摘する声も専門家や保護者からは上がっており、“崩壊”の背景や再生の手だてを探った。学級が機能しない、いわゆる「学級崩壊」が問題視されて久しい。しかし、定義や線引きが難しいこともあって、**「事案ごとに対応しているが、件数として把握できない」**（市教育委員会）のが現状だ。今回、神戸新聞に電話をくれた母親や当該校の校長によると、学級崩壊に陥っているのは、高学年の複数のクラス。**約1年前から落ち着かない雰囲気だったが、新型コロナによる休校を挟んでも収まらず、**担任以外の教員や教頭、保護者までもが学校に入り、歩き回る児童に声を掛けなくてはならない状態になっているという。

【資料8 2021年1月22日神戸新聞】

「教師や見守りの保護者も『くそばばあ』と罵倒されています。うちの子は荒れていませんが、帰宅すると明らかに疲れきっています」と母親は漏らした。同じ学校について、別の保護者から神戸新聞に届いたメールにはこうあった。「毎日イライラする子ども、暴言や暴力、担任の悪口や反抗。機能不全に陥った教室で誰も教師を信用できなくなり、心に何か分からない苦しみを抱えている」校長は、新型コロナによって卒業式や入学式、運動会も中止、縮小されたことに触れ、影響があると推測する。**「低学年に校歌を教えたり、運動会でカッコいい姿を見せたりできなかった。高学年だと自覚する機会が奪われたことも、荒れた要因の一つだと思う」**……そんな中、改善に向け、どう道筋を描けばよいのだろうか。近年、市内で発生した暴力行為の件数は、中学校で減少傾向だが、小学校では徐々に増加。「荒れる子ども」の低年齢化が進んでいることがうかがえる。

【資料8 2021年1月22日神戸新聞】

市教委は昨春、学校を巡回して運営を支援する「地区統括官」を配置。「必要に応じて、スクールカウンセラーや教職員の追加などを検討したい」とする。元教師で、NPO法人「共育の杜（もり）」（東京）の理事長藤川伸治さんは**「コロナ禍の大人のストレスを受け、子どもが持って行き場のない気持ちを抱えている」**と現状を分析。その上で、「担任教諭だけに責任を問うのは無理がある」と強調する。さらに「力で押さえ付けるのではなく、子どもが『教室に居場所がある』と納得できるような環境づくりを目指すべき」としつつ、「特効薬はない」ときっぱり。「教職員も保護者も焦らず、子ども一人一人の思いに耳を傾けて寄り添ってほしい」と求めている。

【資料7】

→新型コロナ禍においても震災時と同様、作文指導に取り組む学校

【資料8】

→休校期間が明けコロナ禍が常態化すると学校の「荒れ」が指摘される
しかし災禍をきっかけに児童生徒が「よい子」化し、
その後粗暴化するというパターンはあくまで言説レベルのもの

<分析視角—包摂/排除の入れ子構造モデル>

一般的な包摂/排除をめぐる議論

- ①<排除>を受けて後に<包摂>が目指されるという時間序列
- ②<排除>が悪であり<包摂>が善であるという価値序列（倉石 2021:20）

「入れ子構造」モデル…

「包摂のなかに排除が、また逆に排除のなかに包摂が宿されているという認識」
（倉石 2021:20）

「包摂と排除の相互参照性」（倉石 2021:59）

<包摂>と<排除>のプロセスは「平凡でないマシンの平凡化」（Luhmann 2002=2004: 91-97）

< 災禍の学校に対する社会学的分析 >

- ①社会の諸システム・個々人の心的システムー教育システム間の
コミュニケーション
→教育システムの自律性強化 (e.g. 作文教育)
- ②教師の心的システムー生徒の心的システム間のコミュニケーション
→相互の予期形成による予定調和的な教育実践の成立
= 包摂, 「平凡でないマシンの平凡化」 (排除を内包)
- ③「平凡でないマシン」としての子どもによる逸脱的行為
→教育システムは「望ましい」姿からの「変化」「悪化」として理解
- ④児童生徒の「心」への帰責
因果的に導かれた「心のケア」による再包摂の試み

< 創発的包摂の可能性 >

予期形成を前提にする道德教育の陳腐さ

オートポイエーシスとしての教育システムは< 包摂 > を志向する限り何者かを
< 排除 > せざるを得ないか？

「創発的包摂」・・・

「既存の秩序により多数の他者を取り込むのではなく秩序を『中断』させ
変形させるものとしての包摂」 （倉石 2021: 105）

【資料9 東日本大震災の被害を受けた学校の教員の語り】

震災直後は、**すごく生徒（と）の距離が近くて、同じ生活者として、そういう立場で教職員も話ができたんじゃないかなと思います。**すごい細かいことと言えば、「汗かいてもお風呂入れないから、体育、嫌だね」とか、「水、困ってるよね」とか。配給される食料も皆同じようなものだったので、「毎日パンばかりだよね」とか、そういうレベルでの……。家のお仕事を、水くみ以外に何をやっているとか、これで大変だったとかっていう、同じ土台に立っての生活者としてのレベルですごく話できて。……**学校を普通に戻そうと。戻るにつれて、また教師と生徒との距離が乖離してきて、……**「水くみ偉いね」とか、「家の仕事担ってるんだね」とか、留守番とか、弟や近所の子どもたちの面倒を見ているとか、避難所でこんなことをやっていたとか、そういうことはまた隠れてしまって、**勉強ができる、運動ができるってことだけの価値にまた収斂していったんじゃないか。**

（清水睦美・堀健志・松田洋介編, 2013, 『「復興」と学校——被災地のエスノグラフィー』岩波書店.）